

## 「正しい？ミサソレムニス(荘厳ミサ曲)の聴き方」

2018年2月

清水 誠

私はショパンが好きだ。ピアノという楽器から美しい音楽を紡ぎ出すという点で彼を越える作曲家はいない。オーケストラ曲を書かせたときの凡庸さは、ショパンコンクールの最終選考で演奏されるピアノ協奏曲の前奏を聞けば明らかだが、その長い前奏のあと、突然始まるピアノの演奏、駆け下り～駆け上がる音粒のきらめき、そしてそのあとに続く情感たっぷりのメロディーは彼が天性のピアニスト・ピアノ音楽の申し子であったことを教えてくれる。また、彼のもっとも有名な曲の一つである「別れの曲」。これはエチュード(練習曲)の一つであるので、途中にはチャカチャカした高度な技量を要求する部分があり、そこは私の能力ではとても弾けないのだが、曲の最初と最後におかれたあの有名な旋律を支える和音の進行は巧みなもので、そこを弾くと思わず「ああ、なんて美しいんだ……！」とため息が出てしまうくらいなのだ。

このショパンが最も敬愛する作曲家は実はバッハ(とモーツァルト)であったが、バッハの最高傑作だと私が思っている「マタイ受難曲」の美しさも比類ないものである。あの58番のアリア「Aus Liebe」(愛ゆえに)のソプラノとフルートが絡み合う旋律はこの世のものとは思えない美しさで、ここも思わず「ああ、なんて美しいんだ……！」とため息が出てしまうのである。「ああ、なんて美しいんだ……！」というセリフは、若い頃、妻に対して何度か使ったくらいで、普通はまず口に出すことはないのだが、ショパンやバッハの音楽に向かい合うとそういうセリフが出てしまうのである。

そのショパンは、ベートーベンがあまり好きでなかったらしい。アラン・ウォーカー著「ショパンーその人間と音楽」の中には、「ショパンはベルリオーズ、リスト、マイヤーベアを、ことのほか嫌悪していた……そしてベートー

ーベンの場合には、ただカンタービレ(歌うように演奏する部分)のパスセージしか好まなかった。」とか「ベートーベンを含む先人の音楽を嫌っていた」などの記述がある。私はショパンを敬愛する側の人間なので、必然的にベートーベンはあまり好きではない。もちろん彼が素晴らしい音楽家であることは否定しないが、あまり親しくお付き合いしたくない、そんな感じなのである。そのベートーベンのミサ曲が、今回の演目である。

### <ミサ曲というもの>

キリスト教には、プロテスタント(新教)とカトリック(旧教)の二つの大きな流れがある。そこから数々なキリスト教の宗教音楽が誕生したわけだが、当合唱団の指導者である郡司先生によれば、前者の最高峰がバッハの「マタイ受難曲」、後者の最高峰がベートーベンの「ミサソレムニス」だということであった。最高峰と言われれば、好き嫌いはさておき、歌わなければならない。そういうことで、実は2013年10月に私はこの曲を1度歌っている。ただ、これは私の合唱歴の第3回目に当たる公演で、まだ右も左もわからず、ただ苦しさの中でひたすら叫んだ記憶が残るのみであった。今回は、そのリベンジである。

ベートーベンには楽聖と呼ばれ、運命や田園のような交響曲、悲愴や月光のようなピアノソナタ、ピアノやバイオリンの協奏曲など、小学生でも知っているような有名な曲、素晴らしい曲を多数作曲した偉人である。しかし、ミサソレムニスは日本人にとってはあまりなじみのある曲ではないだろう。そもそも「ミサ曲」というのが、キリスト教になじみのない人にはどうも胡散臭く感じられるということもあるだろう。

バッハのマタイ受難曲は、宗教曲と言っても、そこにはイエスの生き様や民衆の複雑な感情・行動など人間臭いドラマ・物語性が満載されている。したがって我々はキリスト教の何たるかを離れても、このバッハの美しい音楽によって紡がれるイエスの生涯を思い、感動し涙することができる。しかし、ミサ曲というのは本来がキリス

ト教(カトリック)の典礼のための音楽であり、異教徒にとっては「ミサ曲だよ、謹聴！謹聴！」と言われたところでちょっと困ってしまう代物なのだ。ただ、ベートーベンがローマ・カトリックの家庭に生まれて洗礼を受け、キリスト教に対する深い信仰心を持っていたことは理解しておかなければならない。とにかく「ミサソレムニスにはベートーベンの信仰や様々な思いが込められている。実は結構人間的なものなのだ。そこいらの普通のミサ曲とは違うんだぞ！」ということを理解した上で、この曲を聴いていただきたいと思う。

ちなみにベートーベンの母親は敬虔な信者だったようだが早死し、父親はアルコール依存症であった。そのせいかベートーベンも浮浪者まがいの格好でよく街をうろついていたという。ベートーベンという天才が、きわめて強い信仰を持ちつつ、しかしどこかに大変屈折したものを持っていたということがここからも窺える。最近のある研究によると、アルコールを飲ませた雄マウスと交配した雌マウスから生まれた仔マウスは、成長すると脳神経系を含む様々な部位に問題が出てくることが示されている。そのメカニズムもわかりつつあるようだ。ベートーベンが30歳を過ぎて難聴になってしまったことも、父親のアルコール中毒に起因するものであった可能性は否定できない。そして、そういう様々な不幸な要素がベートーベンのミサソレムニスを他の作曲家のミサ曲と著しく異なったものにしてしまったのではないかと考えてしまうのである。

### <ミサソレムニスはどんな曲か？>

それにしてもミサソレムニス(合唱団の人たちは略して「ミサソレ」と呼ぶ)は重厚な曲である。そして歌手に対しては過酷な曲である。限界に近い高音と低音の素早い切り換え、ため息から咆哮までの音量の制御。そのエネルギーを維持しなければならないのだ。

ベートーベンの合唱曲というと日本では年末に流れる第九が有名だ。しかし第九における合唱の出番は最

終楽章だけで、第九は合唱曲というよりも結局は交響曲なのである。それに比べてミサソレは正真正銘の合唱曲である。ミサ曲の定型である「Kyrie」で始まり「Agnus Dei」で終わる5部から構成されていて、全体で1時間半近くかかるこの曲のかなりの部分を我々は歌い続けなければならないので、そこには耐久レースのような厳しさがある。スポーツで言えば、トライアスロンが近いかもしれない。

トライアスロンにもいろいろなレベルがあるが、一番過酷な「ロング」は、3.9kmの水泳から始まり、180kmの自転車走を経て、42.2kmのマラソンで終わる超過酷なスポーツである。ミサソレはそれを思わせる。波のある水面を泳法やピッチを変えながら泳いでいくのが第1部のKyrie、急な坂道の多いコースを自転車をこいで急速で登り下りを繰り返す、必死に進んでいくのが第2部のGloria、ゴールにたどり着けると信じてひたすら足を動かす続けるのが第3部のCredoということになる。しかし、ミサソレはそれだけでは終わらない。第4部のSanctusには、長い耐久走の中で生まれる恍惚感(これはβエンドルフィンというホルモンの作用である)が漂う。そして、ゴールしたあとの心身離脱状態から、逆に何でもできそうな気分になっていくのが第5部のAgnus Deiという感じだろうか。

### <ミサソレムニスを構成する楽曲達 —

#### 歌手から見た主観的説明>

それではこの曲の音楽的な内容を見てみよう。

前述のように、ミサソレはカトリックのミサ曲の定型である「Kyrie」で始まり「Agnus Dei」で終わる5部からなる楽曲である。時間的に言えば、大学の講義1コマくらいに相当し、要するに全部集中して聴くのはなかなか難しいだろう。講義と同様、内容が難しかったり、つまらなかつたりすれば、聴いている方は当然途中で集中力が切れ、睡魔に襲われてしまったりするわけである。そしてベートーベンのミサソレは「ちょっと頭のおかしい教授が、やたら難解な理論を展開しようとするのだが、興奮して早口になってしまったり、自分の言葉に陶醉してし

まったりして、学生のほうはどう理解したらよいかわからなくなってしまう」という感じの、大変困った作品なのである。今回、聴きに來てくださっている皆さんがそうならないように、これからその骨子の説明を試みるが、いつものように私の独りよがりの解釈であることは勘弁いただきたい。

### (1) Kyrie(キリエ)

Kirie eleison(主よ、哀れみたまえ)、Christe eleison(キリストよ、哀れみたまえ)、Kirie eleison(主よ、哀れみたまえ)という言葉が繰り返される。ソプラノ(S)、アルト(A)、テノール(T)、バス(B)の歌声を挟みながら、合唱団が敬虔に歌い続ける約 10 分間である。

### (2) Gloria(グローリア)

ここは、① Gloria in excelsis Deo(天においては、神に栄えあれ)、② Qui tollis peccata mundi(世の罪を除かれる主よ)、③ Quoniam tu solus Sanctus(主だけが神聖であり…)の 3 つの曲で構成される。

①は興奮状態の上昇音階に始まる神の栄光をたたえる歌で、4声の合唱がお互いに追いかけるように歌いつないでいく部分、②はソリストによる四重唱に始まるゆっくりとした比較的静かな合唱の部分である。その後に来る③は、合唱がテンポを速めながら、しかも時々拍子を変化させながら、どんどん加熱していく部分である。楽譜で言うと約 250 小節、17 ページにわたって続く③の部分は、歌っても歌っても終わりの見えない軌道に入ったような恐怖の楽曲で、その間、一瞬たりとも集中力を切ることが出来ない。そんな中で、我々バスの場合「amen(アーメン)」という言葉を実に 50 回以上叫ぶのである。信仰というもののある種の狂気性を感じつつ、歌う方はほとんど息も絶え絶えになってこの Gloria が終わる。

### (3) Credo(クレド)

信仰の狂気性、などと怪しからぬことを言った舌の根も乾かぬうちなのだが、次の Credo は、我々バスによる「Credo, Credo(われは唯一の神を信じる)」という力強い

歌声から始まる。面従腹背という感があるが、悔しいことに実はこの Credo はなんだか歌っていてとても気持ちの良い曲なのである。あの辛い Gloria を歌い終わってβエンドルフィンが出だしているのかもしれない。追い打ちをかけるように、そこでテノールが「Et incarnatus est……(精霊により、処女マリアより御体を受け、人となりたまえり)」というくだりを静かに浮かびだすように歌いだすのだが、これがまたとてつもなく美しいので、ここに至って、私はすっかりキリスト教に共感してしまってしまうのだ。十字架にかけられたイエスを思って歌うこの部分はやはり感動的で、私もすっかり洗脳されてしまっている。

Credo では、この静かな楽曲の部分の後に、また血圧の上がるような速く厳しいワッパセージが約 280 小節、20 ページにわたって続くのだが、すでに信心深くなっている私はその苦しさを「与えられた受難」として受け止め、最後まであきらめずに歌い続けるので、皆さんも諦めずに目と耳を開いていただきたい。

### (4) Sanctus(サンクトゥス)

ファゴットとチェロの前奏に続き、ソリストが A→T→S→B の順に静かに歌い出して、Sanctus が始まる。それから合唱が「天のいと高きところにホザンナ！」と神に対する歓呼の歌声を上げると、その後このミサソレの聴きどころが来るのである。「やっと少し静かになったのでちょっと眠ろう」などと考えた人は姿勢を正し、耳の穴をかっぼじってよく聞いていただきたい。ここから始まる「Benedictus」は、ベルリンフィルでバイオリン首席奏者のオーディションをやる時の課題曲になるという美しいバイオリンの旋律、そしてそれに乗ってソリストと合唱が歌う実に素晴らしい部分なのである。

バイオリンを弾くのは、オーケストラを担当するオラトリオ・シンフォニカのコンサート・ミストレス、中島ゆみ子氏だろう。彼女はかつて東京フィルの首席奏者だった方で、その豊かな表現力と技術力に支えられた素晴らしい演奏と一緒に歌うなんていうのは、我々にとって何となく贅沢な喜びだろう。4 年前のミサソレ公演では、300

人近い合唱団全員の声が彼女の一本のバイオリンの絃の上に乗っているような感覚におそわれて心から驚いたものだが、今回もそのような感動を味わいながら歌いたいものである。

### (5) Agnus Dei(平和の賛歌)

最終章に入る。ホルンなどの静かな低音の4楽章に続いてBのソロがAgnus Dei(神の小羊=イエスのこと)とゆっくり歌いだす。そこにBとTの合唱が、さらにAのソロと合唱、最後にはSのソロと合唱が加わって、「miserere nobis(我らを憐れみたまえ)」と何度も祈りを繰り返した後に、数拍の沈黙を経て、合唱団が「Agnus Dei」とピアノで歌うのだが、我々の表現力が勝っていれば、この時、合唱団の後ろには、イエスの絵姿が十字架が静かに浮かび上がって見えることになるのだと、郡司先生は言われる。私は後ろを振り返ってみる暇がないが、皆さんは心の目でしっかり見ていただきたい。

そのあとは一転して明るい雰囲気になる。この楽章の冒頭には、ドイツ語で「bitte um innern und aussern Frieden(心の内と外なる平和への祈り)」というベートーベンの言葉が銘記されており、ソリストと合唱団は「dona nobis pacem(我らに平和を与えたまえ)」と平和への希求を高らかに歌い上げるのである。

通常のみさ曲ならここで終わっていても不思議はないだろう。しかし、ここでベートーベンの屈折した所が表れる。すでに耳の聞こえなくなっていたベートーベンは、人生での不公平の意味を理解しようとして神と向かい合ったと言われている。最終的に芸術を神から与えられた聖なる義務ととらえたベートーベンが、その音楽にさらに複雑な構造と美を求めていったことは想像に難くない。みさ曲の最後の部分は、そのような構造の複雑さと独創的な表現の深化を示すものだろう。それは以下のような形となって表れる。

前述した「Pacem(平和を!)」の激唱のあと、舞台は暗転する。軍隊の太鼓や行進を思わせる不穏な響き(これはナポレオンのヨーロッパ侵攻を示しているらしい)の

中で、Aのソロが「Qui tollis peccata mundi(世の罪を除きたまえ)」と不安げに叫び、次いでテノールのソロと合唱がまた「miserere nobis(我らを憐れみたまえ)」と叫ぶのである。このみさ曲の中でナポレオン批判は、彼が楽譜に銘記した「外なる平和への祈り」の一つの形だったのである。

しかし、その後、力強くソプラノのソロが歌い始め、S,A,T,Bの4重唱で曲はまた平和への希求へと戻っていく。合唱も「Pacem, Pacem」と高らかに歌い続け、ようやく終わりが近づくかに見えるのだが、流石に屈折の人ベートーベンである。突然いろいろな楽器が速いパッセージを弾きだし、これが64小節も続くのである。

これじゃあ、いつまでたっても終わらないじゃん！と思うのだが、そんなことを思っている暇はない。64小節後には、合唱が全員で「A-gnus A-gnus Dei!!」と声を揃えてフォルテッシモで叫ばなければならないのだ。間違えて1拍早く入ったりしたら公演的にすべてが台無しである。一拍遅く入ったら個人的には台無しである。みさ曲のような大曲を歌うことはもうないかもしれないので、その失敗は一生の汚点になってしまう。だから、集中力を最大にして備えなければならない。その先にもまだ100小節あるのだが、あとは安心である。「Pacem, Pacem!」と平和への希求を思い切り歌うことにしたい。

こうして2回目の挑戦となると、みさ曲の素晴らしさが私にも徐々にわかってきた。GloriaやCredoの情熱と激しさ、それに対比してSanctusやAgnus Deiの感動と美しさ。やはりベートーベンは楽聖であった。失礼致しました！と言うしかない。

今回の練習は郡司先生を中心に半年以上かけて行われてきたのだが、公演本番の指揮者は米国の指揮者、ジェフリー・リンク氏である。私はまだ共演したことはないが、過去に何度も来日され、当合唱団の指揮もした素晴らしい指揮者だと聞く。とても楽しみである。